

岩波文庫『孟子』を疑う

吾妻 重二

—

岩波文庫版・小林勝人氏訳注の『孟子』上下二冊は、数ある『孟子』の訳注のうちでも最もポピュラーなものであろう。上冊と下冊がそれぞれ昭和43年(1968)と昭和47年(1972)に出版され、以来ながく版を重ねている。先日書店で見た最新版の奥付には、上冊に1999年第42刷発行、下冊に2000年第36刷発行とあったから、いかに長期間にわたって売れてきたかがわかるというものである。私が持っているのは上冊、下冊とも昭和49年版のもので、学生時代に買ってざっと読んだ記憶がある。

ところがしばらくして、私はこの岩波文庫版をほとんど使わなくなった。その理由は簡単で、宇野精一氏の『新釈孟子全講』(學燈社、1959年)を入手したからである。この宇野氏の訳注については、渡辺卓氏がその『古代中国思想の研究』(創文社、1973年、449頁)で「旧説を折衷して最も要領を得ている」と推奨しているのを読んで憶えていたのであるが、出版後まもなく絶版になっただけでなく、なかなか手に入らなかった。しかし十年ほど前、偶然に古本屋で見つけて購入してから、もっぱら本書を愛用するようになったのである。

宇野氏『全講』の長所はいくつかあるが、訓読が正確なこと、注釈が明晰なこと、達意の訳文を与えていることに加えて、各章ごとに要旨がまとめられている点が挙げられる。要するに渡辺氏が言うとおりの、訳注としてきわめてすぐれた仕事であって、『孟子』の内容は本書を読めばだいたいのところは理解できる。これに比べると、岩波文庫版の方は訓読がぐだけすぎており、訳文も冗長であって、かなり色あせて見えた。

いま、岩波文庫版は「訓読がぐだけすぎている」という欠点があると言ったが、その例を一つだけ挙げてみよう(梁恵王篇上、上冊38頁、最新版では40頁)。

原文：狗彘食人食而不知檢、塗有餓莩而不知發。人死、則曰非我也、歲也。

訓読：狗彘人の食を食えども、檢(檢蔵)むることを知らず、塗に餓莩有れども、發(發振)ことを知らずして、人死すれば、則ち我には非ず歳なりと曰う。

この訓読はいかかなものであろうか。訓読文にはルビがついていて、檢に「かいし」(むる)、檢蔵に「くらにおさ」(むる)とあり、餓莩には「うえじにするもの」、發には「にぎわす」、發振には「くらをひらく」とある。人にもわざわざ「たみ」というルビがある。これは理解に便ならしめようという所作なのであろうが、このような読み方は正しい訓読では

ない。そもそも訓読文に続いて現代語訳を載せているのだから、原文の意味はそれを読めばわかる。わざわざ現代ふうにくだいて訓読する必要はないのである。ここはやはり、

狗彘人の食を食いて、検するを知らず、塗に餓莩有りて、発するを知らず。人死すれば則ち我に非ざるなり、歳なりと曰う。

というふうにおソドックスに訓読するのがよい。検、発は「けん」「はつ」と音で読み、「餓莩」も「がひょう」と音読みし、「人」はもちろん「ひと」と読む。この点、宇野氏の『全講』はさすがに正しく訓読している。かりに授業で、学生が岩波文庫版のように訓読したとしたら、私は迷わずに「それは違う」と言うであろう。ついでにいえば、検について岩波文庫版は「かいしむる」と訓じているが、どういう意味なのかよくわからない。飢饉に備えて食糧をあらかじめ「買い占めておく」ということなのかもしれないが、語釈にも現代語訳にも明確な説明がないので要領を得ない。わかりやすい訓読文にしようとして、かえってわかりにくくなっているのである。検と発について、それぞれ括弧内に検蔵、発振と補っているのについても同様で、はなはだ理解に苦しむ。岩波文庫版の訓読の仕方は、おおむねこういった調子なのである。

こうして、私は岩波文庫版とは縁遠くなった。学生にもあまり本書を推薦していないが、それには相応の理由があるのである。

二

これらのことはしかし、前置きにすぎない。ここで私が言いたいのは、実はもっと別のところにある。岩波文庫版の執筆態度に疑問を感じるからである。

昨年のものであるが、授業の準備をしていて、岩波文庫版と宇野『全講』の或る章を読み比べてみたことがある。すると、両書の記述、とくに注釈の文章に強い類似性があるのに気がついた。出版時期は宇野『全講』の方が岩波文庫版よりもかなり先だつから、これは岩波文庫版が宇野『全講』を踏襲したものに違いない。そう考えて、先般、三日ほどかけて両書の注釈のすべてに目を通し、さらに踏襲関係をあらわす一覧表を作ってみた。その結果、大雑把な数字であるが、岩波文庫版が宇野『全講』を利用したと思われる箇所が、上冊で 39 箇所、下冊で 486 箇所、何と合計 525 箇所にもものぼることを見出した。このことを私は、かつては岩波文庫版のみを使い、近年は宇野『全講』のみをもっぱら用いていたために、迂闊にも知らなかったのである。

いま、その踏襲一覧表を掲げてもよいのであるが、それでは与えられた紙幅を大幅に超過してしまうので、以下、踏襲の例をいくつか挙げることにしたい。『孟子』は全七篇から成っているので、各篇から 1 例ずつ、全部で 7 例の引用に限ることにし、1a) — 1b) というように、岩波文庫版と宇野『全講』の注釈を a と b のペアにして掲げた。両者を読み比べていただきたい。なお、2c) — 2d) は 2a) — 2b) に関連する注なので、ついでに付したも

のである（所掲の岩波文庫版上冊の頁数は、最新版ではこれより2頁ずつ増える）。

梁恵王篇

- 1a) 罍（きん）、鐘鼎・軍器・廟社など重要な物ができたとき、犠牲の動物を殺してその血を塗って、災・穢をのぞき不祥を祓い、神聖にする儀式。（岩波文庫，上冊49頁，注四）
- 1b) 罍 音キン、チヌル、重要な器物・建物などができた時に、動物を殺してその血液を塗り、それによって穢・不祥を祓って神聖にすること。（全講，39頁）

公孫丑篇

- 2a) 褐寛博、褐は粗い毛織の布。寛はゆるくて大きい、ダブダブの意。博は朱駿声の説文通訓定声によれば、夫（おとこ）と同じ。褐寛博は、ダブダブの粗末な毛の服を着た男〔で、夜はよぎやふとんなどつかわず、そのままごろりとねたりもする。〕すなわち賤者のことをいう。（岩波文庫，上冊115頁，注六）
- 2b) 褐寛博 褐は粗末な毛布、賤者の服。寛博はダブダブのこと。ダブダブの粗末な服、それをきている下賤の者。なお加藤常賢博士「漢字の起源」八（一〇頁）によると、清の朱駿声は博は夫と同意である（『漢文通訓定声』）といっている。それならば、つぎの褐夫とまったく同意となる。（全講，100頁）
- 2c) 褐夫、褐をきた男。褐寛博と同じ。（岩波文庫，上冊115頁，注七）
- 2d) 褐夫 褐を着た男、褐寛博と同じ。（全講，100頁）

滕文公篇

- 3a) 招虞人以旌、虞人は、山沢・苑囿を守る役人。旌は、美しい鳥の羽根を竿の先につけた旗。大夫を招くには旌を用いるのが礼であり、〔士を招くには弓を用い、〕虞人を招くには皮冠を用いるのが礼であったという。なおこの話は左伝の昭公二十年十二月に記されておる。（岩波文庫，上冊226頁，注二）
- 3b) 虞人 苑囿を守る役人。／旌 鳥の羽を竿の先につけた旗。大夫を招くに用いる。虞人を招くには皮冠を用いるべきであるという。『左伝』（昭公二十年）にこの時の話が記されている。（全講，190頁）

以上は岩波文庫版上冊における例であるが、どれを見ても宇野『全講』の記述を利用してのはまず間違いのないといえる。2a)の例において岩波文庫版が朱駿声の『説文通訓定声』を引用しているのも、おそらく宇野『全講』が朱駿声「漢文通訓定声」（漢は説の誤植）を引くのを孫引きしたものであろう。岩波文庫版はそれと明記せずに『全講』の記述を借用しているのである。2a)と3a)の例でわざわざ〔 〕内に文を補っているのはなぜなのかよくわからないが、宇野『全講』にはない記述だということを示したのであろうか。

このような傾向は下冊に至っていっそうはなはだしくなるのであって、踏襲の跡が486箇

所にもわたって見出せることは先述したとおりである。次に、その中から例を挙げてみよう。

離婁篇

- 4a) 言無実不祥、朱子は(一)天下の言に実際に不祥なものはない、(二)言に実のないのは不祥である、との二説を引いて、どちらが是かわからない、闕文があるのかも知れないといっている。趙岐は凡そ言にはみな実がある云々と解して、ほぼ第二の説と同じであるが、次の句とのつぎ具合から見て、訳者は第一の説によった。(岩波文庫, 下冊 78 頁, 注一)
- 4b) 言無実不祥 朱子は(一)言葉そのものに実際に不吉なものはない、(二)言葉に実のないものは不祥である、という二説をあげ、どちらが正しいかわからないといい、脱文があるかも知れぬといっている。趙岐の注に「凡そ言ハ皆実アリ」云々とあるのは、孫奭によれば後の説と同じと思われる。後の説だとつぎの句とのつぎが悪いかから、いま前の説をとる。(全講, 271 頁)

万章篇

- 5a) 禄は以て……、この禄とは、下士および庶人在官者が受ける禄である。彼らは公務に服して自分ではもちろん耕すわけにはゆかないから、その代わりに一般農民に準じて百畝の田の収穫を禄としてもらう。なおこの代耕の禄を、趙岐は上農つまり九人分の扶持だといい、朱子は〔礼記王制篇の文によった徐度の説をとって〕九人から五人までの扶持だという。(岩波文庫, 下冊 179 頁, 注一七)
- 5b) 禄足以代其耕也 この禄は下士および庶人在官者の禄である。彼等は公務に服して耕作できぬから、一般農民の百畝の収穫をその代りに貰う。趙岐によれば上農すなわち九人分の扶持であるといい、朱子は九人乃至五人(下農)分であるという。(全講, 336 頁)

告子篇

- 6a) 五たび湯に就き、五たび桀に就きし者、趙岐は「湯王が伊尹を桀王に貢物にしたが、桀王は用いないで湯王に返した。このような事が五回もくり返された」という。胡応麟は五とは五回とは限らず、たびたびの意味だといい、翟灝はたびたびの意味なら、三を用いて五を用いた例はないという。(岩波文庫, 下冊 289 頁, 注六)
- 6b) 五就湯五就桀 趙岐は、伊尹が湯から桀に貢物とされ、桀が用いずして湯にかえし、また桀に貢するというように、五回も往来したと解する。胡応麟は、五はたびたびの意味だというが、翟灝は、たびたびの意には三を用い、五を用いる例のないことを述べている。(全講, 405 頁)

尽心篇

- 7a) 儒、孔子の流れを汲む学派。その教えは仁義を説き中庸をたつとぶ。なお孔子の学派を儒または儒者と呼ぶのは、孟子の書〔本章および滕文公上篇第五章〕にはじめ

て見ることで、孟子以前のものには見当たらない。（岩波文庫、下冊 416 頁、注三）

7b) 儒 孔子の学派。とくに孔子学派を称して儒または儒者（五一）というのは『孟子』の書にはじめて見えることで、それ以前にはない。（全講、496 頁）

* 吾妻注：ここで（五一）とあるのは、『孟子』全体を通じての第 51 章、すなわち滕文公篇上第五章をいう。

いちいち解説する必要もあるまい。いずれの例においても文章が酷似していることは、これまた一読して明らかだからである。岩波文庫版は宇野『全講』を用いつつ、いくらか表現を改めて済ませているのである。4a)では朱子の説を『全講』からまるごと引きうつすばかりか、朱子の第一の説をとるという判断まで借用している。また 6a)に引用する胡応麟と翟灝の説にしても、とくに原典を調べたわけではなく『全講』の所説をそのまま用いたのであろうし、7a)には儒ないし儒者という呼称に関して思想的に重要な指摘があるが、これも『全講』を襲ったにすぎないと思われる。

これを我々はいかに理解すべきであろうか。ここでは『孟子』の各篇について 1 例ずつを挙げるにとどめたが、このわずかな例だけからしても、岩波文庫版がどのような性格をもつものであるかは推測できるであろう。ある程度自明な事柄の場合、注内容が多少似かよってくるのは致し方ないけれども、上引の例などはそのような偶然の相似ではない。もちろん先行の研究を参照することが大切なのは言うまでもないが、問題は、岩波文庫版が宇野『全講』についてまったく言及するところがない、という点にある。結局これは参照したという次元ではなく、「剽窃」したということになるであろう。

三

小林勝人氏は岩波文庫版下冊のあとがきで、上冊の注釈が簡略であったのに鑑みて、というふうに前置きして次のようにいっている。

この「上巻」の簡略な結論だけの記載法に対して友人や読者などより強い要望もあるので、「下巻」では結論だけではなく、一般の通説や異説などもかなり詳しく載せ、且つ必要に応じて訳注者の私見も述べて、読者の理解の便に供することにした。

つまり『孟子』下冊の注では通説や異説を詳しく載せ、また私見をもつけ加えたというのである。文字どおりに解釈すれば、宇野氏『全講』の所説はここにいう「一般の通説や異説」に相当するのであろうが、そのことは全然明記されておらず、また小林氏が新たに付したという「私見」にしても、実は宇野氏に負うところが多いことは上に見たとおりである。私の所持する昭和 49 年版下冊の腰帯には「正確な原文に綿密な考証を盛りこんだ読み、注、訳文を付す」とうたわれているが、その「綿密な考証」なるものも、実際には多くを宇野氏の業績に頼ることで成り立っているのである。

岩波文庫版は、なるほど労作かもしれない。原文の細かな校訂などは宇野『全講』にはない作業ではあるが、しかし労力のかかなりの部分は宇野『全講』を吸収するのに費やされたという印象を受ける。実際、岩波文庫版とりわけその下冊と『全講』の記述を各章ごとに逐一比較してみれば、注語の選定から注釈の内容、表現に至るまで、似かよっているところが頻出することに誰しも気づくであろうし、またここには挙げなかったが、現代語訳の文章について見ても、岩波文庫版は宇野『全講』を相当程度借用していると思われる。しかし、それにもかかわらず、どこを見渡しても宇野『全講』の存在については一言も言及されていない。岩波文庫版は近年の邦人の業績について、安井息軒、滝川君山、武内義雄などの説は律儀にそれと明記して引用しているのに、これはいったいどうしたわけであろうか。驚くべきことに、岩波文庫の最新版（1999年版、2000年版）についても事情は同様なのであって、同じ版型を使っているためであろう、宇野氏の業績のことは「はしがき」にも「凡例」にも「あとがき」にも、また本文中にも、やはり触れられていないようである。これでは訳注者の見識が疑われても仕方がないであろう。

私自身は小林氏にも宇野氏にも面識はない。宇野氏は岩波文庫版を当然知っていたはずであり、岩波文庫版の出版当時、どのような感想を持たれたかはわからない。二人の間に何らかの了解があったかもしれないと想像することもできるが、それは今の場合さほど問題にならないと思う。

私は学生の卒論作成に際して、他人の業績を「黙って」借用してはいけないといつも言っている。他人の業績を参考にすることはもちろん必要であるが、これを借用したり引用した場合はそのことを必ず明記しなければならない、そうでなければ「盗作」になってしまう、と。当然のことであろう。ところが岩波文庫版は、宇野氏の『全講』をなぜか「黙って」借用しているのである。これでは教育者のはしくれとして「しめしがつかない」ではないか。

何もわざわざ他人のあら探しをしなくてもよからう、という意見もあるかもしれない。私としても、この文を書くにあたっていくらか躊躇したことは事実である。しかし岩波文庫版は文章執筆における基本マナーに反している点があり、また寡聞にしてこのような指摘に接したことがないので、あえて一文を草した次第である。——岩波文庫版『孟子』はそれなりの労作かもしれないが、しかし執筆態度はフェアではない、したがってあまり誉められたものではないというのが、私の結論なのである。

なお、ながく絶版だった宇野氏『全講』は1973年に集英社の全訳漢文大系に収録されたあと、1998年、明治書院刊の『宇野精一著作集』第3巻に収められた。慶賀すべきことであるが、一般読者の目に触れる機会が少ないのはたいへん残念である。文章表現をいくらか現代ふうに変更、単行本として再刊したなら、きっと歓迎されることと思う。

(2001年2月13日)